やっとかめ探偵団と殺人魔

やっとかめ探偵団と殺人魔

清水義範

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—十二—十三
(〒112-11)
光文社　文芸編集部

長編小説　やっとかめ探偵団と殺人魔

一九九三年　三月一五日　初版一刷発行

著者　清水義範

発行者　大坪昌夫

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三
電話　東京(〇三)三九四二—二二四一(代)
振替　東京六—一一五三四七

印刷所　大日本印刷

製本所　大日本印刷

定価一、四〇〇円
(本体一、三五九円)

落丁本・乱丁本は本社でお取り替えいたします。© Yoshinori Shimizu 1993
ISBN4-334-92219-8 Printed in Japan

目　次

見知らぬ自殺者……5
謎の撮影者……45
禁じられた目撃者……87
まぎらわしい被害者……129
浮かんだ容疑者……169
悲しい殺人魔……209

装画　浅賀行雄
装幀　熊谷博人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やっとかめ探偵団と殺人魔

見知らぬ自殺者

1

「波川さん、波川さん、どえりゃーこったぎゃあ」

のっけからこれでは、愛知県人以外の読者には、何のことやらちんぷんかんぷんではないか。意味の解説をする。

〝どえりゃー〟は、〝大変な〟という意味の名古屋弁である。『ゴルバチョフ大統領が新幹線で名古屋駅を通るだけで、どえりゃー騒ぎだがね』などという具合に使う。

〝こったぎゃあ〟は〝ことだぎゃあ〟の短縮形で、〝ことですよ〟の意味だ。

ついでにもうひとつ、名古屋弁談義をしておこう。この本の題名に使われている〝やっとかめ〟とは、久しぶり、という意味の古式ゆかしい名古屋弁である。近ごろではあまり耳にしなくなったが、お年寄りによく似合う味わい深い言葉なのだ。

話を戻して、今ここで発せられた、どえりゃーこったぎゃあ、というのは、『銭形平次』で、ガラッ八が言うところの、

「大変だ、大変だい」

という科白に相当するのである。

ただし、ここで血相変えてどえりゃーこったぎゃあ、と言っているのは、ガラッ八ではなく、芝浦かねよ、というお婆ちゃんである。小学生くらいの背丈で、いつもねずみ色の前かけをしている、ご近所の情報屋婆ちゃんなのだ。

そして彼女が叫びながら飛びこんだのは、平次親分の家ではなく、名古屋は中川区の一角にある、「ことぶき屋」という小さなお菓子屋であった。その店を一人でやっている波川まつ尾という、七十四歳のお婆ちゃんが、この物語の主人公なのである。

「また芝浦さんのどえりゃーことか。まあそれ、ききあきたぎゃあ」

キビキビした口調で、まつ尾はそう言った。

顔がふくよかで、決して貧相ではない老人である。目にはどことなく知性的な輝きが宿っていた。

近所の老人たち、いや、老人ばかりではなく子供や若い男女にまで慕われている、リーダー・タイプで、サバサバした性格の名物婆ちゃんなのだ。ことぶき屋には一日中いろんな人が訪ねてくる。

「そうだねゃあて。これはほんとにどえりゃーことなんだぎゃあ。二丁目の楢崎さんとこ知ってりゃーすでしょう」

「工務店のきゃあ」
「そうだわ。楢崎工務店という大工さんのとこだ」
「あそこは大工さんだねゃあで。一応、建設会社やってみえるんだぎゃあ」
「それはどっちでもええわ。あの楢崎さんとこで、人が死んだんだと」
これにはさすがに冷静なまつ尾も驚きの声をもらした。
「ほんとか」
「わし、嘘なんか言えせんぎゃあ。あそこの隣りの島田さんの奥さんに今きいてきた話だもんで」
「あそこの誰が亡うならしただ。確か四人家族だったわなあ」
「うん。旦那さんと奥さんと子供が二人な。そんだけど、死んだのはあの家の人だねゃあと」
「どういう話でゃあ、それ。あの家で誰が死なしたんだ」
「それがよう、なんだしゃん、不思議な話だでいかんわ。あの家で、男の人が死にゃーたんだけど、どこの誰かは知らんのだと」
「隣りの島田さんにはわからんのか」
「そうだねゃあぎゃあ。誰も知らん人だと」
店の奥の畳二枚のスペースにすわっていたまつ尾は、あきれたような顔をした。
「お前さん、何を言っとるんでゃ。言っとることが変だで」
「わし、頭が悪いでうみゃあこと言えんけどよう、とにかくそういうことなんだぎゃあ」
「楢崎さんとこで、男の人が死んだ言やーすか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「うん」
「ところが、それが誰なのかは誰も知らんのか。楢崎さんとこの人も」
「そういうことだぁ。おかしな話だろう」
「おかしすぎるわ、そんなもん」
しかし、あとになってわかったのだが、芝浦かねよの情報に誤りはなかったのである。まさしく、そういう不思議な事件が平和な名古屋の下町地区でその日、発生したのであった。
「大体、人が死んだいうのはいつのこった。わし、そんな話きいとらんぎゃあ」
「まんだついさっきのことだぎゃあ。二、三時間前のことだそうだで」
そこで、まつ尾の目の奥が微かに光った。
「そう言やあ、二時頃、パトカーのサイレンの音や、救急車の音がしとったなあ」
「それだぎゃ。わし、そのサイレンの音が気になってよう、何があったんか調べてきたれ思って二丁目へ行ったんだで。そうしたら、楢崎さんとこの家の前にお巡りさんが何人か立っとらして、えりゃあ騒ぎになっとったんだわ。そんで、島田さんの奥さんつかまえてどういうことかきいてきたった」
「そしたら知らん人が死んだ言うんか」
「そうなんだと」
「どういうふうに死んだんだ。そこがわからんと、どういう話かわっかれせんぎゃあ」
芝浦かねよは、首をすくめてさもおそろしげにこう言った。
「鉄砲で頭撃って死んだと」

「誰が撃ったんだ」
まつ尾も、話の内容が只事ではないと感じて言葉の調子が厳しくなる。
「その人が自分で撃ったんだぎゃあ。おそぎゃあことだろう」
「自殺か……」
まつ尾はポツリとそう言って、首をひねった。
「知らん人が突然訪ねてきて、そこで自殺したいうことぎゃあも。そんなおかしな話があるきゃ」
でも、事実はそういうことだったのである。どうしてそんなことが起きたのかについては、警察も大いに頭を悩ませることになる、謎に満ちた事件であった。
なお、芝浦かねよが言っている鉄砲というのは、正確に言うと、猟銃である。謎の自殺者は猟銃を持参して楢崎工務店にやってきて、その事務所の一角で自分の頭を撃ち抜いたのだ。
「なんでそんな変なことがおこるでゃ」
まつ尾婆ちゃんはそう言って、右手の人さし指で自分のこめかみのところをグリグリともんだ。考えこんだ時の彼女の癖であった。
夏の盛りの、八月上旬のことであった。もうじきお盆である（名古屋のお盆は、他の多くの地方と同様、月遅れで、つまり八月中旬に行なわれる）。
平均して夏は東京より二度から三度気温が高い名古屋は、うだるような暑さに包まれていた。

2

八月ともなれば、日本全国が高校野球フィーバーで大騒ぎとなるのだが、それは一応、愛知県でも同様である。この地方の人はどういうものか、愛知、岐阜、三重の三県をひとかたまり、と捉えているので、テレビニュースを見ていても、この三県の出場校に対する大変な肩入れを感じることができる。隣接している県なのに、静岡県に対しては全くの無関心である。あれは関東地方だで、仲間だねゃあがや、と愛知県人は思っているのである。

ただし、どうだろう、地方によっては高校野球への関心が、異常なほど高いところがあって、県民全員が心から自分の県の代表校を応援している、話題と言えばそればっかり、なんていう印象のところがあるのだが、愛知県での高校野球の人気は、それほどでもないような気がする。もちろん一通り応援はするが、熱狂するほど高校野球が好きではないのではないか。

それよりも、愛知県人、そして特に名古屋市民は、中日ドラゴンズのほうを愛しているのである。高校野球で県の代表校が勝つことより、プロ野球で中日ドラゴンズが勝つことのほうが大事なのである。逆に言えば、名古屋市民はまるで高校野球で自分の県の代表校を応援するように、中日ドラゴンズを応援しているのだ。年中、高校野球の会期中のようなもので、燃えること燃えること。

ただしまあ、今年の夏は例年より高校野球に対しても盛りあがりがあった。愛知県代表が名門の中邦（ちゅうほう）高校で、あそこならまずまずの成績をあげるだろうと期待できたのである。

「ベスト8までは行くだろ」
「うん。そんで、いっつもそこらへんまでだけどなあ」
そういう、名古屋の夏であった。
「鉄砲で頭を撃ったら、痛あだろうなあ。ああ、おそが。なんまんだぶ、なんまんだぶ」
信心深い吉川常というお婆ちゃんが、手を合わせて念仏を唱えた。ことぶき屋へ、近所の婆ちゃんたちが集合しているのである。道一筋違うだけの二丁目で、謎の自殺騒ぎがあったというのでみんな興奮しているのだ。誰からともなく、集会場のようなことぶき屋に集まってしまうことになる。
「頭撃ったら即死で、痛あ思っとる暇もあれせんだろう」
と言ったのは体力抜群のスポーツ婆ちゃん、早坂千代だった。
「そんでも、撃つ前がおそがないきゃ」
くず餅にきな粉をまぶして幸せそうに食べながら、水谷島子がそう言った。いつ見ても何かを食べているという不思議な婆ちゃんなのだ。
「それはおそがいわ。ドキドキしてまうぎゃあ」
愚痴の粂山よねがそう言った。
事件の翌日である。
「鉄砲が長あもんだでえも、事務所の腰かけのネジのとこに撃つとこ引っかけて自殺したげなだわ」
芝浦かねよはそんなことまでを調べあげていた。

「どういうことでゃ」
「鉄砲が長あでお前さん、自分の頭に向けたら撃つとこに手が届かんぎゃあ。そんだで、腰かけのよ、高さを調節するネジに撃つとこ引っかけて、そんで引っぱると弾が出るぎゃあも」
「お前さんも、ようそんな詳しいことまで知っとるもんだな」
まつ尾は感心すると言うよりは、あきれたような顔をしてそう言った。
「今日、まあいっぺん島田さんとこ行ってきいてきたったもん。あそこも、隣りのことだでいろいろきいとらっせるわさ」
「芝浦さんはお巡りさんみてゃあだなあ」
粂山よねがそう言うと、
「そんなことあれせんて。それどころか、本物のお巡りさんにうろうろしたらいかん、って叱られてまったぎゃあ」
「そんで、結局まんだその自殺した人が誰かいうことはわかっとれせんのか」
「それはわしも知らんのだぎゃあ。楢崎さんとこは、旦那さんも奥さんも警察へ呼ばれていろいろ調べられとるそうだけど、そこでの話までは知らんでえも」
うん、とまつ尾は確認するようにうなずいた。
「今ごろは、謎が解けとるかもしれんなあ」
誰に言うともなくそう言う。
「なんでそう思やーすね」
グループの中ではやや若い早坂千代がそう反応した。

「なんでて、普通だったらそういうことになるぎゃあ」
婆ちゃんたちはまつ尾の意見に耳を傾ける顔になる。みんな、頭の働きが鋭いその人に対して、一目も二目も置いているのだ。
「あの工務店で、家の人が知らん男の人が自殺した言うんだろう。こんな人知らん言っとるのは楢崎さんだわなあ」
「そうだわ」
「その言葉に嘘がねゃあかどうかだわさ。本当は知っとる人だけども、事情があって知らん言っとるのかもしれんぎゃ」
「どういう事情でゃあ」
「そこまでは知らんぎゃあ。とにかく、自殺しよう思っとる人間がどうしてよその家へやってきて、そこでやるかだわ」
「とんだ迷惑だわなあ、やられたほうにしてみたら」
芝浦かねよがそう言った。
「そうだろう。ということは、その迷惑をかけたれ、思っとるわけだわさ」
「わかってきたで」
早坂千代が、指の骨をポキポキ鳴らしながら言った。
「自殺した人は、楢崎さんとこに対して恨みを持っとったんだな。そんだで、どうせ自殺するならいやがらせにそこで死んだれと考えたんだわ」
「あれ？　そういう話だったきゃ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com